

高村光太郎氏
大江健三郎氏

絶讃！

ダンテ研究の水準を一気に高めた

記念碑的翻訳

わが国初の、イタリア語原語からの

警醒社版・完全複製

『神曲』全訳を完全複製

山川丙三郎 訳×全三巻（地獄・浄火・天堂）

ダンテ 神曲

この美しさは、あなたのもの

■神曲 (Divina Commedia) とは——一三〇七年頃〜二二年頃の作。ダンテ自身が地獄・浄火（煉獄）を経て天堂（天国）に至るまでの物語。信仰による魂の救済を描き、以後の世界文学に与えた影響は、はかり知れない。

■ヨーロッパ文学の基底をなすダンテ『神曲』、岩波文庫版の底本。世界文学に於ける古典は、山川丙三郎による稀有の訳業により日本文学の古典となった。これを読まずに『神曲』は語れない。山川が師と仰いだ新井奥邃の言葉がダンテの詩魂を照射する！ 装丁は新井の弟子、柳敬助。



ダンテ (Dante Alighieri 1265 - 1321)

*この案内は本書刊行時のものです。
(1993年11月)

学術資料出版 大空社出版

(2024.7)

残部
数組

分売不可

山川訳『神曲』の文体

大江健三郎

僕はダンテの『神曲』を読むことで自分の生のもっとも大切なところをみだした、といたい気持をもって。イタリア語は手さぐりするだけの人間なので、様ざまな翻訳のお世話になった。邦訳は、上田敏にはじまり、そのほとんどを参看したのではないだろうか。

そのなかで僕がとくに魅きつけられたのが、岩波文庫版山川丙三郎訳『神曲』である。文体のおだやかな威厳。生真面目でいて、この訳者には謹直なユーモアとでもいうものがあつたはずと感じさせる言葉の選び方。

ダンテ研究はもとより大きい進歩をかさねてきたが、山川訳の当時として無理のない問題点も、シングルトンの伊英対訳・注釈を脇においていけば、僕のような素人の読者にも納得することができる。

『懐かしい年への手紙』という長編小説に、僕は山川訳を導入した。それによって、いくらかなりと自作の品格を高めたことと信じている。

(作家)

ダンテー山川ー奥邃

石川重俊

山川丙三郎先生は、ダンテの『神曲』翻訳中、新井奥邃先生のもとで、奥邃先生の門下の人たちと共に先生の教えに接した。山川先生にとってこれは、奥邃先生の霊性とのお出合いである。人について、人の墮落、苦患、迷蒙について、人の罪と神の救いについて、アポカリプ的に語る奥邃先生の霊性と呼吸しあつた山川先生の心の深みにおける省察こそは、山川先生のダンテ研究の源泉と言える。山川先生は、奥邃先生に請い、『神曲』各巻の初めに文章をいただいた、と述べている。奥邃先生は、自ら書かれた「不求是求」、「難録」、「手控書」、「晩年余息」から文章を与えた。これは『神曲』に対する序文や、序論や、解説ではない。単なる感想文などでもない。「山川ダンテ」の本質に関わるものである。いま、警醒社元版がこの重要な奥邃先生の文章もそのまま、複製されたことは、山川先生のダンテ『神曲』の評価にあらためて光を当てることになるであろう。

(元東北学院大学文学部教授・元福岡大学文学部教授)

高村光太郎とこの『神曲』

北川太一

翻訳が機械的な正しさを越えて生き生きとしたのちを持ち続けるためには、どんなに深い対象への恭敬と熱愛とが要ることか。

ミケランジェロの心を奪い、ポードレルとともにロダンを養い、その数々の傑作の泉、彫刻『地獄の門』の主題ともなったダンテの『神曲』は、また光太郎の書でもあつた。そして大正三年の『地獄篇』から大正十一年の『天堂篇』まで、つねに光太郎の座右にあつてその思いを養つたのは、山川丙三郎訳の『神曲』であつた。

最後の『天堂篇』を贈られた時、新井奥邃、柳敬助、江渡狄嶺らと同じ精神圏にありながら、ついに相会う機会を持たなかつた光太郎は、その篤い敬意を訳者にこころ書き送っている。

「あなたの御訳のダンテ神曲は……其後幾度か繰返して通読、いつもあなたの厳正忠実な訳と全体に溢れるこの敬虔な心とに推服して居りました。今度又此の天堂篇を直接あなたから頂いて読む事の出来るのを実に幸福に思います。神曲がこんな立派な日本語になつて私等はじめ此からの人々の読み味うにまかせられた事は真に一大事と 생각합니다。」

此事に就てはあなたに私等読者からどんなに感謝しても尽きない気がします。この天堂篇も此夏通して又私は喰べるように読む事でしょう。今からその時のうれしさを想像します。」

それからどれだけの翻訳が、それぞれの思いを込めて、さまざまな訳者によって試みられたことか。しかしいまも光太郎の言葉は生きて、心をひそめて読む者に、この書の硬質の珠玉のような、日本文学の古典としての位置をさえ指し示す。

新しい複製によって、光太郎と同じうれしさを多くの人々が共有すればいいと心から思う。

(文芸評論家)

日本語の「美」と「深さ」の教え 清水浩三

山川丙三郎先生の「英詩」の講義を受けた時のノートを今も大切に持っています。次のように書いたところがあります。

ダンテを愛したキーツ。「神曲」からヒントを受けたものです、といわれた先生は黒板に

Inferno

Nessun maggior dolore,

Che ricordarsi del tempo felice

Ne la miseria と書かれ「清水さん読んで下さい」といわれた。「先生、イタリア語は分りません」というと「あなたは、無知ですね」といわれた。

それ以来私は、先生の言われた「無知」に徹することを知り(最近になり、これが山川先生の信条でもあつたことを悟りました)「知」に向つて一生涯ひたむきに進む人生のあることを教えられました。

山川先生から、英詩を読むことを通して、日本語の真の遣い方と、その響きの美と深さとを教えていただきました。

大空社によって警醒社版の複製刊行がなされることは望外の喜びであり、多くの方の待望に応え、日本の文化史の一頁を飾るものと信じます。

(元東北学院大学文学部教授・東北学院同窓会総主事)

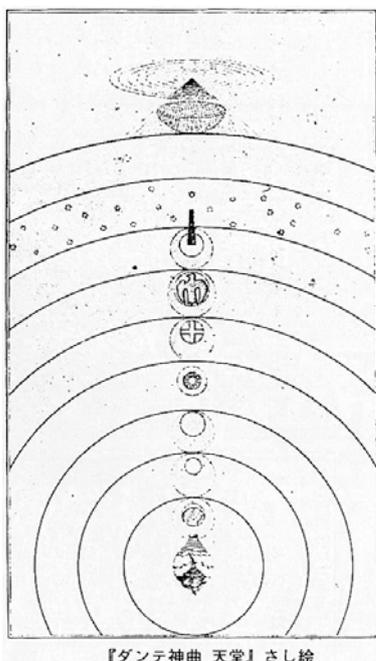
明治九	一八七六	三月三日新潟県北蒲原郡上館村に、山川経邦・えきの三男として生まれる。
二二	一八八九	三月、新発田町商業学校卒業。九月、北越学館入学。
二四	一八九一	二月、北越学館廃校。この頃受洗。
二五	一八九二	九月、仙台の東北学院予科に編入。労働会の一員として新聞配達などをする傍ら、演劇部員として活躍。
二八	一八九五	三月、東北学院普通科卒業。四月、文化専修科入学。九月、島崎藤村、英語教師として東北学院に赴任。
三〇	一八九七	三月、文化専修科卒業。六月、東北学院書籍係として勤務。この頃、ケアリー訳ダンテ『神曲』に出会う。
三二	一八九九	一〇月、上京し、憲兵司令部陸軍通訳となる。
三七	一九〇四	六月、憲兵司令部退官。八月、渡米後カリフォルニア大学入学、ドイツ語、イタリア語、フランス語、ギリシャ語、ラテン語及びスラブ系の言葉を学ぶ。とりわけ、中世英語には卓越した力を示す。
三九	一九〇六	一年間、フランス語教授ラマルルの家にボーイとして住み込む。
四一	一九〇八	四月、米国高等教育資格試験合格。一〇月、太平洋神学校で神学の講義を聴講し始める。
四五	一九一二	七月、帰国。在米中に知りあった画家柳敬助の影響を受け、新井奥達に傾倒。以後奥達を生産の信仰の師とする。友人達とのダンテ読書会を通して、少しずつ、しかし、根深く『神曲』に心酔していく。
大正二	一九一三	春頃から、『神曲地獄篇』の翻訳に着手。
三	一九一四	一月、警醒社から『神曲地獄篇』出版。一時、新潟に帰郷。再び上京し、『浄火篇』翻訳に着手。
四	一九一五	一月、親戚関係にあった医師渡辺護の次女で、一七歳年下の直と結婚。本郷駒込運動坂町の二軒長屋に新居を構える。貧困にあえぐ山川の『神曲』翻訳を経済的に助ける後援会が、友人達によって作られる。
五	一九一六	四月、長男浄誕生。
六	一九一七	五月、『浄火篇』出版（警醒社）。
七	一九一八	二月、次男純誕生。
八	一九一九	一〇月、東北学院教授に就任。東京の本郷から仙台市南鍛冶町に移転。
一〇	一九二二	七月、長女恵誕生。
一一	一九二二	二月、『天堂篇』出版（警醒社）。三月、高村光太郎より「ロダンと言葉」と書簡が贈られる。
昭和四	一九二九	九月、岩波書店より『新生』出版
七	一九三二	師範科長に就任
二二	一九三七	三月、『地獄篇』出版以来、山川の最良の批評者であり協力者である大賀壽吉死去。二人の間には、膨大な数の往復書簡がある。
一五	一九四〇	名譽教授となる。
二〇	一九四五	三月、次男純（二十七歳）肺結核で死亡。六月、長男浄（二十九歳）の戦死が確認される。
二二	一九四七	八月十七日、腎臓結石のため、死去。七十一歳。『地獄篇』改訳は、二二曲九六行で中断。 （東北学院大学教養学部助教教授・ダンテ「神曲」読者会主宰）

詩聖ダンテ現わる！

- 1265 5月、ダンテ、フィレンツェに生れる。
- 1274 ダンテ、ベアトリーチェに出会う。
- 1289 6月、ダンテはカンパルディーノの戦いにフィレンツェ騎兵として加わる。
- 1291 ゼンマ・ドナーティと結婚。
- 1307~8 『地獄』執筆。
- 1308~13 『浄火』執筆。
- 1313~21 『天堂』執筆。
- 1321 9月14日歿、56歳。



『ダンテ神曲 浄火』さし絵



『ダンテ神曲 天堂』さし絵

地獄 ダンテはウエルギリウスに導かれて暗い林を離れ、地獄の門よりたえず左に道を取りながら地獄の底に下り、南半球を経て再び地上に出る。

浄火 ウエルギリウスはダンテを導いて海浜より登り、右に道をとりながら浄火の門の内外を経て楽園に達し、ベアトリーチェに出会う。

天堂 ダンテは地上の楽園を離れ、ベアトリーチェに導かれ昇りゆき、地球に最も近い天より次第に遠い天に至り、ついに至高の天に達する。

地獄

第一曲

われ正路を失ひ、人生の羅旅宇にあたりてどある暗き林のなかにあ
りき
あ、荒れあらびわけ入りがたき此林のさま語ることいかに難い
な、恐を追思にあらたにし
いたみをあたふること死に劣らじ、されどわがかしこに享けし幸を
あげつらはんため、わがかしこにみし凡ての事を語らん
われ何によりてかしこに入りしや、善く説きがたし、眞の路を棄て
し時、睡はわが身にみち／＼たりき

地獄 第一曲

一

+

◆完全複製◆

原本の装幀をそのままに複製しました。上製本・天金・貼函入り

(原本書影)



ダンテ神曲 山川丙三郎訳 全3巻

〈原本：警醒社書店、大正3～11年刊〉
[大空社1993.11復刻] 四六判・上製 4-87236-856-8

(2024.7)

残部
数組

分売不可

学術資料出版
大空社出版
www.ozorasha.co.jp

eigyo@ozorasha.co.jp
TEL:03-5963-4451
FAX:03-5963-4461
東京都北区中十条4-3-2 (〒114-0032)